

シンポジウム

「炎症性腸疾患に用いるカプセル内視鏡の現状と可能性」

司会 久松 理一（杏林大学消化器内科学）

長沼 誠（関西医科大学内科学第三講座）

IBD 診療において近年提唱されている treat to target (T2T) の実践には疾患活動性のモニタリングと治療目標達成の評価が必須であるが、タイトモニタリングは治療成績の向上に寄与する可能性がある。現在内視鏡的寛解が T2T の target と位置付けられている中で、カプセル内視鏡は、小腸を含めた全消化管観察可能な侵襲性の低い検査法として IBD の診療に適したツールである。一方 IBD 診療におけるカプセル内視鏡の普及は十分であるとは言えない。本セッションでは IBD 領域におけるカプセル内視鏡検査の現状と課題について議論したい。発症早期の診断モニタリング、予後予測としての有用性に関する臨床研究はもとより、AI による自動読影・炎症検出アルゴリズム開発の現状、さらにはカプセル内視鏡運用の課題や障壁についての演題も歓迎する。